

柳田国男における郷土への視角

— 農業経済学と「農村生活誌」との関わりを手がかりとして —

溜池善裕*

1 はじめに

明治期において、農政学に与した柳田国男は、小農や小作農を経済的貧困から脱却させるために、農民の自治による経済的自立の方法を模索した。そして彼は、農民教育にその活路を見出し、農民の経済的自立にとって必要な知識とはどのようなものであるのかを模索したのである⁽¹⁾。

当時の柳田には、国家の発展のために農民が犠牲になるというのではなく、国家の発展も農民の経済的貧困からの脱却も同時に成り立たなければならないといった社会政策的視点があり、農民教育論もまたこのような視点に立つものであった⁽²⁾。しかしながら柳田は、農政学のみならず執着することはなかった。彼は、1907(明治40)年に、自宅で郷土会を始め、1910(明治43)年には、新渡戸稲造宅へ場所を移して、本格的な郷土研究に着手していったのである。

このような、柳田の郷土研究への着手は、勿論、当時の国家政策と全く不可分ではない。1908年、第2次桂内閣のもとで、内相平田東助は地方改良運動の全面的な展開をはかり、地方の経済力を強化して租税増徴を実現しようとした。地方改良の意図は、日露戦争後の国家財政建て直しにあり、そのための地方への着眼があった。柳田は、政府による地方(ちほう)への関心を意識しながらも、別の意図で地方(ぢかた)というものを捉えようとしたのである。

本稿は、柳田が農政学において農民教育に社会政策実現の活路を見出し、農民の自立に必要な知識を模索した同じ時期に、郷土研究に着手したことに注目する。そして、彼の農民教育論が展開されている農政学と郷土研究の連関の意味を明らかにすることによって、農民、ひいては当時の大多数であったという意味での国民に対して、教育的意義において郷土を柳田がどのようにとらえていたかを明確にすることを意図するものである。この点に関する考察は、戦前の郷土教育運動をとらえなおすためのものでもある。

2. 柳田の農政学における地方^{ちかた}の視点

(1) 柳田の農政学における農民

農政学において柳田に認識されている農民は、概に筆者が指摘したように、「沿革上の根拠」

* 筑波大学大学院

を問うという歴史的な問題分析能力がないために、現に自分が置かれている状況や自己存在を認識することでできず、その結果、現在の自分に必要な農業に関する知識や道徳を持ち合わせ得ず、農業における経済的な自立を実現することができないというものである⁽³⁾。柳田の農民教育論は、このような農民に知識と道徳とを付与し、農民の経済的自立をはかることを目指した。彼は教育論の中心に知識論を置き、農民の経済活動において生きてはたらくという知識の質を問題にしたのである。

ここで留意しなければならないのは、彼は眼前にある貧しい農民を救う方法を農政論において展開してはいたが、彼が教育によって育成しようとする将来の農民は、どのような困難があろうとも耐乏しながら農村に滞留する者を決して指していないことである。

柳田は、農民教育論において、教授方法を問題にすると、将来の生活の指針を自己決定させる方法を指向していた。彼は「何故ニ此ニ居住スルカ如何ニシテ生活シ来リシカハ如何ニシテ今後此ニ居住し且生活シ行クヘキカ」⁽⁴⁾ ということ、言い換えれば、自分が農村で生活していくか、あるいは、農村を出て、都会で生活していくか、そして、どのような方法によって生活していくべきかを農民の子弟自身が決定するような教授方法こそが当時の農民には必要であると考えていたのである。そしてまた、農村での生活をするか否かの判断を農民の子弟が自ら行うことができるように、「居所ヲ中心トシタル地理」や「歴史ノ科目ニ就テ云フモ居所ヲ中心トスル」ことを教育内容に設定することを主張したのだった。柳田は、子どもの目が広く社会に対して向けられ、その上で自身の農村における将来的な去就を決定させることが何よりも重要であると判断したのである。

柳田は農政学において、小農や小作農を問題としたが、現状を是認し、貧困な生活に甘んじる小農や小作農を問題としたのではなかった。彼が問題とし期待を寄せる対象は、農村に漠として滞留する農民ではなく、自己の置かれている状況を経済的な視点から客観的に判断し、農業経営における自らの手腕によって経済的に自立した生活を送りながら農村に居住することを決意した農民だったのである。

(2) 農民の自立と地方の活性

柳田が問題とする農民が、自己の置かれている状況をもとに農村に居住することを決意した農民であったということから、柳田における農村の位置づけというものが、固定的なものではなく、将来に向けて流動性をもっていたということが推察される。なぜなら、農村にとどまるか否かを判断することを農民にせまる以上、将来的には、農村から農民が流出することを前提としているからである。

柳田が農政学において農民教育論を展開した時代は、農村の人口が都会に流出していく現象が

顕著となりつつあった時代であった。このような現象について、彼は「利益」という「健全なる経済人の所為判断」であり、「人口の移動は一つの生産力の分配方法」であるという理由からは認する立場をとり⁽⁵⁾、次のような提案をしたのである。

「如何にして補充（田舎から都会へ流出した人口の補充のこと；引用者註）に必要な新農民を作るべきか、如何なる方法を以て新なる分子を入れる、かという^{ママ}に、昔の如く田舎を以て都会の生存競争の失敗者、牢人の隠れ場所とせず、更に進んで相応の招致方法を立て、是非共智力あり資力ある者を歓迎して、段々に新田舎を作って行かねばならぬ」⁽⁶⁾

柳田における農村は、「招致」という言葉に示されるように、農村に生まれた者でなくてもかまわないという前提のもとに、「智力」と「資力」のある者によって作られた「新田舎」なのである。ここで柳田が言う「智力」と「資力」のある者とは、「新に田舎に土着しやうと思ふ企業家」や「労働者」および商業家であり、彼らの移入によって実現されることがらは、「小農の収入の道の増加する」ことである⁽⁷⁾。したがって、彼の目指す「新田舎」は、新しい資本による農村経済の活性化によって招来される、都会の経済とは直接の関係をもたない農村であることが明らかになる。⁽⁸⁾

先に指摘した、農村に関する柳田の将来にむけての流動性とは、余剰の労働力が都会に流出した後でもなお農村での生活を営んでいこうという者と、農村へ移入し、そこで工業を営む者や工業を中心として結びついた者によって経済的に活性化され、新しく変貌していくという流動性なのである。そして、この農村を地方という言葉であらわすならば、柳田は、農民の自立と地方の活性とを不可分のものとして捉えていたということになる。

3 郷土研究における柳田の地方の視点

(1) 「農村生活誌」の視点

柳田の農政学における地方の視点は、彼の郷土研究においてどのように反映されていったのだろうか。

柳田の郷土研究は既に諸先学によって指摘されているように、農政学において彼がとってきた地方経済という考え方とは別に、民間信仰や伝説といった色彩を強くもつようになった⁽⁹⁾。柳田は、雑誌『郷土研究』の目的について次のように述べている。

「まず読者に説明せながら一事は、『地方経済学』という語のことで。記者の状にはそうは書かなかったはずで、慥かにルーラル・エコノミーと申して遣りました。（中略）もし強いて和訳するならば農村生活誌とでもして貰いたかった。何となれば記者が志は政策方針や事業適否の論から立ち離れて、単に状況の記述簡明のみをもってこの雑誌の任務としたいからです⁽¹⁰⁾。」

ここから判断する限り、農民の自立や、地方の経済的活性という柳田の農政学における視点は、「状況の記述」である「農村生活誌」に吸収されてしまっているとせざるを得ない、それはまた、農政学での彼の関心事であった、地方における農業政策や、工業を中心とした新しい事業とは直接的なつながりをもたないものであった。

南方熊楠は、『郷土研究』について、柳田と往復書簡を交わしているが、彼は、柳田の「農村生活誌」について、次のように批判する。

「地方経済学は、地方に道ができた、犬に車を牽かす所と牽かさぬ所あり、むかし紙を作ったが今は布を作る、売淫女が片手に魚を乾かす等のことを序列したばかりでは、日本中の一村一小字いづれも日々生業なき所なれば、人別に骨相を記するごとく、事煩わしくて何の益なし。もしこれを学説らしきものとせんとならば、利害のよるところを攻究せざるべからず。産業の改変、地境の分割、市村の設置、水利道路の改善、衛生事業、またことには地方有利の天然物を論ぜざるべからず。しかるに小生気がつかぬゆえか、地方経済云々を主眼とする『郷土研究』に、従来何たる地方経済らしき論文の出でしを見ず」⁽¹¹⁾。

南方の批判にあるように、柳田の農政学において見られた地方経済の視点は、最早、『郷土研究』には見る事ができず、ある地方にみられるきわめて具体的なことがらの詳細な記述によってかわったのである。

(2) 柳田における「農村生活誌」の位置

柳田の関心は、農政学において強く持ち続けた地方経済的な視点から、「農村生活誌」的な視点へと移動した。しかし、これをもって、柳田のこれまでの地方に対するとらえかたが全く転換してしまつたと捉えてよいのだろうか。

この点を考察するにあたって、手がかりとなるのが、『日本農民史』（早稲田大学政治経済学科学講義録、1925）および『都市と農村』（朝日新聞社、1929）である。いずれも、柳田が郷土研究に着手するようになってから、10年を経過したのちに発刊されたものであるにもかかわらず、両者が手がかりとなるのは次の二つがあげられよう。それは、第一に、柳田が郷土研究に着手した頃は、先に触れたように、農村の人口が都市へと流出していく現象が顕著になりつつある時代であり、郷土会においても、代々木村等の都市部の農村が変容しつつあることの報告がされ、農民史や「都市と農村」と問題は、既に柳田にとって強い関心事となっていた⁽¹²⁾。したがって、柳田の郷土研究において「農村生活誌」的な視点が顕在化してきた原因をこの両方の問題に帰して、検討する意義があると考えられる。そして、第二に、『郷土研究』において南方から批判された当時は、渦中にある柳田自身もまた「農村生活誌」をどう位置づけるのかについては、こたえを得ることができなかったが、後年、柳田は両書を著すことで、「農村生活誌」の位置づ

けをはかろうとしたと考えられるからである。

柳田における農業経済は、彼が農政学を正面から論じた時期の農村や農民についての史的な考
研といった視点を発展させたものであった。

農政学において彼は、産業組合論を展開したが、政府が地方改良運動を実現する目的で報徳社
を産業組合に統合しようとしたことに反対し、報徳社の由来を説き、報徳社が農民が生み出した
自治という史的な所産であることを明らかにした。その上で彼は、報徳社のもつシステムのうち、
産業組合に積極的に生かすべき点のあることを論じている⁽¹³⁾。このような、目前にある問題へ
の史的なアプローチは、『日本農民史』や『都市と農村』においては、より顕著である。

柳田は両書の目的を各々、次のように述べている。「主たる標的を国民生活の未来に置いて此
研究を始める。即ち我々日本人の現在の生活の欠点と長所、この二つを誘発した原因は如何。つ
まりは如何にして日本の農民は、今日のやうな生活をするようになったのかを、説明し得よう
に力めて見たい」（『日本農民史』）⁽¹⁴⁾「自分は特に日本の都市が、もと農民の従兄弟によつ
て、つくられたことを力説した」（『都市と農民』）⁽¹⁵⁾これらに見られるように、農民や農村、
そして都市の現在における状況を「由来」という史的なアプローチによって説明していこうとい
うのが柳田の両書における目論見である。そしてこれが際立つのは、彼が農業経済を論じるとき、
学問とは「横には国の全部、縦には過去と未来とを包含した総括的研究」とであると明確に規定
し、とりわけ「経済の学問は目前の各種の経済現象を研究して其由来と趨向とを明らかにし、兼
て将来発生すべき問題の為に予め能ふ限りの解決をして置くもの」と断言している部分である⁽¹⁶⁾。
柳田は、経済学において、目前の経済現象の「由来」を明らかにすることを前提とし、過去から
連続する時間の軸上に現在というものを置くことによって、現在の問題を史的に相対化してそれ
を意味づけしようとした。その意味づけとは、なぜ目前にある経済現象が起こったのかというこ
とであるが、このことはまた、今後、生起してくる問題を予期させ、それについては何をなすべ
きかを策すことを可能にさせるのである。

このように、目前の問題を解決するために、史的に現在の問題を相対化するというアプローチ
は、彼の経済学に顕著であった。しかしながら、ここで最も強調されるべきは、経済と「農村生
活誌」との関連を柳田がどのように考えていたかという点である。

彼は、「書物なり人の説なり、乃至は久しい行掛かりなりに、知らず識らずの間に自分を拘束
せられて居た」ことから脱却するためには、「唯一つ、先づ精確に周囲の事実を知ること、次に
は理論を之に当て嵌めて、それが果たして自分たちのばあいには、適応するや否やを考へてみるこ
と、即ち是である」と述べている⁽¹⁷⁾。ここから考えられるのは、柳田の言う「精確に周囲の事
実を知る」ための手がかりが「農民生活誌」なのであり、「当て嵌め」る「理論」の相対が彼の

言う農業経済学については学問だという点である。つまり、柳田にとって、農業経済学というのは、「農村生活誌」を包含した、より広い視野をもったものであったと言える。この意味で、「農村生活誌」は、柳田の農業経済学の一部であると同時に、農業経済学を支える重要な、事実の集積だったのである。

4 柳田における農業経済学の視野

(1) 「農村生活誌」における農民

柳田の農業経済学は、「農村生活誌」を包含するより広い視野をもつものであることは明らかになった。それでは、彼の農業経済学における、より広い視野とは、具体的にどのようなものだったのであろうか。このことを考察するために、史的アプローチから導き出されたかれの農民観を明らかにしてみる。

柳田が史的アプローチを行うことによって、農民に関して指摘したことから、第一に、農民についての再評価である。柳田はそれを次のように言う。

「村の静思に養はれた堅実なる社会法の承認、天然の豊富によって刺激せられたる生産興味、それとは独立した精緻なる感覚と敏活なる同化性の如きは、何れも他の文明諸国の所謂不熟練労働者の間には、到底見出すことの出来ぬものである」⁽¹⁸⁾

柳田が再評価する農民は、自己をとりまく自然に同化し、どのように自然を生かしていくかという、積極的なはたらきかけをする特性をもった者である。これに対して、都市については、それが偶然にできたものであり⁽¹⁹⁾、「単なる群居であり、水と油とを共に盛り得る器」⁽²⁰⁾であって、そこでの生活は「中心の無い都市生活」⁽²¹⁾なのである。柳田にとっての農民は、労働というものを視点に据えた場合、都市住民よりも、極めて生産性の高いモデルとなりうる存在である。

第二は、農村で生活する農民に対する、消費の自治を取り戻すための「文化基準」の必要性の提唱である。柳田のいう「文化基準」とは、「それぞれの人は家が、世の流行と宣伝とから独立して、各自の生計に合わせて如何なる暮らし方をしようか」を考えるためのものである⁽²²⁾。かねてから柳田は、農村が都市の商人によって浸食され、無用の消費を生みだしていることを危惧し、農村においてそれを減らすことこそ急務であるとしていた⁽²³⁾。そのために柳田が必要だとしていたのは、まったく「各自の生計に合せた生活、つまり「世の流行と宣伝とから独立」した自治的な消費生活をする事である。その指針となるのが「文化基準」である。柳田は、このような「文化基準」を農村で生活する農民に確立させようとしたのである。この主張は、筆者が別の論文であきらかにしたように⁽²⁴⁾、農民が農業を自主的に経営していくという、生産面を

きわめて重視する視点とは異なり、消費といった家計に特に注目している点が特徴的である。

第三は、農村において農民が保持している慣習・制度の社会改造への貢献についての指摘である。それは「片輪な幾つかの新都市に比べると、農村は何れの点から見ても決して鄙ではない」⁽²⁵⁾のであり、「少なくとも田舎人は、却つて都市住民に教ふべき資格を持つて居た」⁽²⁶⁾のだという主張に裏打ちされる。そして、柳田の社会改造は、彼がこれまで問題としてきた農村だけでなく、都市を含めた社会全体を改造していこうとするものであり⁽²⁷⁾、そのためのモデルを農村に求めようとするのである。

(2) 農業経済としての郷土研究

以上のように、柳田が指摘アプローチによって到達したのは、生産性の高さと、社会改造に貢献しうるものを持つてはいるが、反面、消費の自治を確立し得ない農民観である。この農民観は、彼が農政学に正面から取り組んだ時期の農民観とは、次の点で異なっている。

a. 先の農民観では、農業経営に力点が置かれ、個々の家計における消費に目が向けられることはなかったが、どのような消費を行うかを考えることが農民には必要であることが強く述べられている。

b. 先の農民観では、生産性と言うときは、農業への投資に対する農業による生産の比率によって示されるもの、その意味では、数字によって示されるものを問題としていたが、農民の優れた諸特性を認め、数字にはこれまで現れなかった農民自らがもつ生産性への可能性を指摘するようになった。

c. 先の農民観では、農民はむしろ変えられて然るべき存在であったが、彼らのもつ慣習や制度を史的所産として認め、史的であるがゆえに社会改造に貢献しうるとして、かれらのもつ慣習・制度にたいする積極的な注目を行った。

このように農民観をとらえるとき、柳田の郷土研究が、彼自身の中に、これまでの彼にはなかった経済学的な視点を生じさせていることに気づくのである。そして、その経済学的な視点とは第一に、消費という視点であり、第二に、数字に表れてこない可能性という視点であり、第三に、制度の転換というよりはむしろ現実にある制度をどのように生かすかという視点である。これまでの柳田は、新しい政策によって、制度を転換し、新しい社会を目指していた。そこには、政策が全く実施されることが必要条件であった。しかしながら、柳田の農政論は、当時の学界では問題とされず、したがって、実施されることはなかった。それは、彼の農政論が、現実の社会の構造に照らして、そこから乖離するくらいがあったからでもある。柳田が、現実そのもの、つまり、柳田の言葉を借りれば、「状況の記述」という「農村生活誌」に注目せざるを得ない理由はここにあった。そして、柳田の現実は、消費という、農民の生活での極めて日常生活的な場面にまで

至るような、極めて高い具体性を持ち、数字では把握することはできないが、史的なアプローチによれば把握可能なものなのであった。

すなわち、柳田の郷土研究には、このような現実を現実としてとらえようとする柳田の農業経済学的な視点があったのだと結論づけられる。柳田の郷土は、彼の農業経済における新しいリアリティー発見の場であり、その意味では、彼の経済学的な視点は、間断なく連続していたといえるのである。

5 柳田における郷土の教育的意義

これまで述べてきたように、農業経済における新しいリアリティー発見の場が、柳田にとっての郷土であった⁽²⁸⁾。そのリアリティーは、「理論を之に当て嵌めて、それが自分たちのばあいには、適応するや否やを考えて見る」ためのもの、すなわち、理論を成長させるには不可欠のものなのである。したがって、柳田は、郷土というものには着目するが、それは、理論として通用するものをもつように農業経済学を発展させるために必要なリアリティーの存在する場にすぎなかったということになる。このことは、大藤時彦が『郷土の生活の研究』（筑摩書房、1967）の「解説」で次のように述べていることから理解されよう。

「本書の著者の目ざす郷土研究は、最初から独自の立場をとっていた。すなわちその目的は、一地域たる郷土の研究をするにとどまらず、日本全域のことを研究するにあった。換言すれば郷土にいて郷土人が日本全体のことを研究せんとするにあった。（中略）つまり各地の郷土の研究をするのは、それらを比較研究して日本を知らんとするためであった」

大藤の言うように、柳田の郷土は郷土のみにとどまらず、日本全体に向いていたのである。そして、柳田にとっては、当時の郷土教育は、「個々の郷土の研究の成績を以て、直ちに各自の居住地の普通教育、殊に幼少なる者の智徳の養成に、施し得べしとする楽観、乃至はその早急なる計画」において、「私たちの予期しなかった点」をもつものであった。さらに、そのような「早急なる計画」について柳田は、「我々はまだ一度もさういふ大胆な希望を抱いたことは無い」と批判したのであった⁽²⁹⁾。したがって、柳田においては、郷土は郷土研究によって明らかになった「農村生活誌」というリアリティーのままでは、教育的意義をもつものではなかった。そのリアリティーから形成された理論というものがなければ、リアリティーを説明できないからである。この意味で、柳田は「農村生活誌」というリアリティーと、農業経済学という理論の連関を極めて重視したといえる。

おわりに

柳田の郷土への視角は、郷土教育を唱えた当時の人々とは異なるものであった。前者のそれがリアリティーと理論の連関であるならば、後者のそれは、リアリティーそのものに対する認識であった。本稿は、戦前の郷土教育を柳田の郷土への視角をもとに、据え直そうとする試みの取り掛かりに過ぎない。柳田がリアリティーと理論との連関に着目することによって見出したものは、具体的には何であるのか、それが、リアリティーを問題とした戦前の郷土教育とはどのような相違を見せているかは今後、筆者があきらかにすべき問題である。

註

- (1) 拙稿「柳田国男の農政学にみる『農民教育論』の構造」（『関東教育学会記要』no. 16, 1989）。拙稿「社会政策としての柳田国男『農民教育論』 — 横井時敬の『農民教育論』との対比で」（『筑波大学教育学研究集録』vol. 14, 1990）。
- (3) (1)に同じ。
- (4) 柳田『農業政策学』『定本』28、p. 409。
- (5) 柳田「都鄙問題に関する私見」（『大日本農会報』no. 307, 308, 309, 1907）。
- (6) 同上。
- (7) 同上。
- (8) この点については、傅田功は次のように指摘している。「小農制に基づく農業所得の低位性と、増大する農家余剰人口とが、労働力収益化の機会を家内工業に求めていたことは明白であり、農村家内工業を破壊しようとする各種の力に対して、最も執拗な抵抗を続けたものは外ならぬ農業経済それ自身であった。柳田はかような現実を背景に、単なる生計維持の手段としての農家副業といった観点ではなく、むしろ積極的に地方経済の自立につながるような方向における兼業の機会増大、すなわち農民資本による小工業発展の必要性を主張しているのである。明治三七年、『中央農事報』に連載された柳田の『中農養成策』は、農村の発展のために（中略）地方工業の奨励もまた積極的な役割をになうものとしてとり上げられており、地方の自立を待望する柳田の考え方をうかがいうるのとして貴重である」（「柳田国男と地方主義」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』1977, No.10）。
- (9) 山下紘一郎「郷土会とその人々」後藤総一郎監修、柳田国男研究会編著『柳田国男伝』（三一書房、1988）参照のこと。
- (10) 柳田「南方氏の書簡について」（『郷土研究』vol. 2, no. 7）。
- (11) 南方熊楠「『郷土研究』の記者に与うる書」（『郷土研究』vol. 2, no. 5, 6, 7, 1914）。

- (12) 郷土会における報告事項に関しては、柳田国男編『郷土会記録』（大岡山書店、1925）を参照のこと。
- (13) 柳田「報徳社と産業組合との比較」（報徳会での講演、1906、『時代ト農政』実業之日本社1948、所収、但し本書は聚精堂版の1910発行の初版を使用している）pp. 207-274。
- (14) 柳田『日本農民史』（早稲田大政治経済学科講義録、1925、後に刀江書院から1931に発刊）『定本』16, p. 169。
- (15) 柳田『都市と農村』（『朝日常識講座6』朝日新聞社、1929）『定本』16, p. 234。
- (16) 柳田はここでさらに「個々の農業者の経済智識」の発達を認めながらも、それが「目前の實際に処するだけの断片的の智識」であるとして否定的に捉えている。（前掲柳田『時代ト農政』p. 3）。
- (17) (15)に同じ、pp.254-255。
- (18) 同上書、p. 315。
- (19) (14)に同じ、p. 244。
- (20) 同上書、p. 188。
- (21) (15)に同じ、p.378。
- (22) 同上書、p. 384。
- (23) 柳田は次のように述べている。「中央市場の強大なる管理権は、主として田舎を相手とする商品の数量が基礎であり、今ある販売機関は只彼等にのみ利用せられて居る。地方が自主的に消費を整理すれば、彼等の仕事の半分は不要になる。用でも無い物を売るから買ふ、それが生活の上に意味が有るか無いかは、問ふ所で無いといふ様な商業の繁昌は、独り之を支持する大都市の名誉でないのみならず、又之を可能ならしめたる農村の恥である」（(15)に同じ、p. 250）。
- (24) (1)に同じ。
- (25) (15)に同じ、p. 243。
- (26) 同上書、p. 301。
- (27) 柳田は次のように述べている。「都市の個人主義と自由なる進出とを制御して、農村問題の解決策に共せんといふ学者は以前から相応にあつた。併し此人たちは農を愛し村を思ふの余り、時としては今の市民の過半数が農村人の子であることさえ忘れて居た。それから又田舎に農村問題がある如く、町にも都市問題のあることさえ忘れていた」「我々は市人たると村人たるとを論ぜず、既に社会をもつと住みよいものにしようといふ志を抱いて居る」（(15)に同じ、p. 254）。

- (28) もちろん、このリアリティーの発見は、新渡戸稲造が1898年に示唆し、1907年2月14日の第2会報徳社例会の講演で明らかにした「地方学」の考え方と無関係ではない。その考え方とは、「一村を細密かつ学問的に観察すれば国家社会の要も明らかにすることができる」（前掲山下「郷土会とその人々」『柳田国男伝』所収、p. 396）という「地方学」の考え方である。後年、この考え方は、後藤総一郎によれば『北小浦民俗』に具体化するという。後藤は次のように述べている。「この視角は、後年の柳田国男の『北小浦民俗』のモチーフと方法にもっともよく示されたといえよう。すなわち、北小浦が解れば佐渡が解る。佐渡が明らかになれば日本が、そして人類史が理解可能だと柳田が述べたのだった」（後藤総一郎「地方学の形成」『地方史マニュアル1』1976、『柳田学の思想的展開』伝統と現代社、1976、所収、p. 160）。
- (29) 柳田「郷土研究と郷土教育」（『郷土教育』no. 27, 1933、『国史と民俗学』六人社、1944、一所収、p. 160）。